



84

# 脱プラゴミと 脱炭素のマリアージュ



小林 光

東京大学総合文化研究科客員教授  
工学博士・元環境事務次官

ようやく我が国も 2050 年での温室効果ガス実質排出ゼロを宣言し、主要先進国と<sup>くつわ</sup>肩を並べた。米国もパリ協定への復帰が期待できるようになり、60 年での脱炭素を目指す中国の取り組みとあいまって地球温暖化対策は世界中で急速に進展しよう。

来年 11 月に COP 26 をホストする英国の動きは特に急である。11 月 18 日にはジョンソン首相自ら 10 ポイント・プランを発表し、12 月 4 日には同国の NDC（パリ協定で提出が求められる国別目標）を一層厳しいものへと更新した。このうちプランの方の中身は水素活用や電気自動車とお馴染みの政策分野のことだったが、8 番目の「自然」という項目には興味を惹かれた。ここには炭素吸収や激化する気象災害へのレジリエンスの強化という文脈での政策の紹介もあるが、中身にはもっと哲学的な内容もあり、国土の景観や生態系そして農業の環境を一層エコロジックにしていくとのことであった。

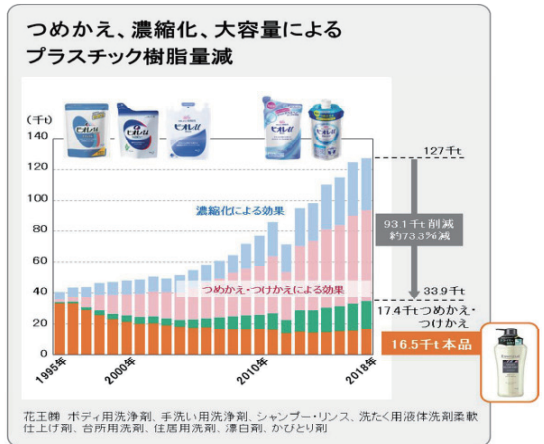
自然に基礎を置く生活や就業ができれば、炭素をたくさん出す産業に糊口を委ねる度合いは低くて済むという発想だろう。日本も、50 年での脱炭素に向けた戦略を練り直すのだろうが、是非、こうした経済の根っこを見直す政策も盛り込んで欲しいところだ。その有力候補は緑豊かな日本ならではの自然共生ももちろんとして、特に物づくりが命の我が国の場合、各種廃棄物を出さないクリーナー・プロダクションの振興は欠かせないはずだ。

論者が主宰する C S V 経営塾（エコツツエリア協会が運営）の最近回は東京都が盛んに訴えている低炭素化の文脈の中での脱プラゴミの取り組みをテーマにした。都からプラゴミを減らす対策を聞いたが、一番感心したのは、脱プラゴミを進める企業連合 C L O M A（クリーン・オーション・マテリアル・アライアンスの頭文字）の会長を務める榊花王の発表だった。図のとおり、詰め替え容器への転換、中身の濃縮減容化などで、対策なしケースに比べ 70% 以上のプラスチックの減量に成功、ここ 20 年以上にわたってプラスチック使用量を増やしていない。

同社によれば、計算の前提に複雑な説明が要るので公表していないが、プラスチックの減量に伴い CO<sub>2</sub> の SCOPE 3 での排出量も大いに減っているようだ。必ずしもプラスチックが悪いのではなく、ポイ捨てをしたり、廃棄物管理がずさんだったりして、プラゴミが環境中に流出するのを放置している我々が悪いのだろうが、製品供給側の工夫で、相当な割合で環境負荷が減らせることが数字で示されていた。そしてプラスチックの減量は CO<sub>2</sub> 削減にも役立つ。環境ものづくりにはまだまだやれることがあると頼もしく感じた。

論者は先月、環境授業をするため与那国島を訪れた。この島は CO<sub>2</sub> のバックグラウンド濃度の精密観測を行う測候所が置かれているだけでなく、日本最西端の国境の<sup>くぶら</sup>久部良小学校では生徒さんたちが、海岸清掃を定期的にしていて、海洋ごみの、いわばモニタリングスポットにもなっている。生徒さんのお陰で人が行ける砂浜は本当にきれいだったが、人が立ち入れない崖下の水際線は写真のような模様だった。海洋プラゴミ対策も待たないでと実感した。脱 CO<sub>2</sub> の号令を契機に、是非、海洋プラゴミをなくす取り組みを次の温暖化対策計画に入れてもらいたいと思った。一粒で二度おいしく、取り組み意欲も倍増するに違いない。

＜図＞花王におけるプラスチック使用量の推移



(与那国島西海岸の様子)